



犬の使い魔
～犬とアロエとリバイバル～



林愛根



目次

犬の使い魔 ～犬とアロエとリバイバル～	1
-------------------------------	---

犬の使い魔 ～犬とアロエとリバイバル～

～犬とアロエとリバイバル～

第1異 オセシメ☆魔法学園

俺の名前は斎藤透。

今日もけだるい登校に身をやつしているところだぜ！！

宿題やってねえ……. どうしよう？

ん？ あんなところに小型犬がうろついてるぞ！

野良犬だな、可哀想に……. って、こっちに来たァ！！

「初めまして、コックーヤ様、もう私のことは覚えていませんよね？」

私の世界に来ませんか？ とても住みやすく、落ち着いたところですよ？」

「いや、行かないから、ってか犬がしゃべってなんかきしょいから！！

俺は学校に行く！ 見なかったことにする。それじゃあ、またな、キモイワンちゃん！！」

犬は遠い目をして言った。

「私とあなたの運命の赤い糸は切っても切れません。時代が変わり、何が変わっても、あなたとの結びつきは決してほどけるものではない。さっ、行きましょう、私の世界、狂気と歓喜の間へ。

混沌の聖なる光よ！ 我らを照らしたえ！！」

とたん、すさまじい光が辺りを覆う。

「な、なんだこれは、体の力が抜ける……………！！！！！！」

「もう少しです……もう少しで……素晴らしい世界へ着きます。待ってて。」

俺の意識は地に墮ちた。

◇ ◇ ◇

「っ……ここは……どこだ？」

俺は目を覚ました。すると目の前に美少女の姿が！

白銀の輝く長髪。淡い憂いをたたえたバイオレットの瞳、

人並みの身長に、程よく膨らんだ胸……神々しいまでに美しい美少女の姿がそこにあった。

「まさか、本当に召喚魔法が使えるようになったとはね！ ☆ それも人型とは」

「なかなか、人は召喚できないよ、いぬぬん、すごいね！ ☆」

い、いぬぬん……！！？　なんだ、その変わった名前は……！！

しかし、どこか懐かしい感情が芽生えてしまったことは否定できなかった。

いぬぬんはつつかと歩み寄り、俺の顔を持ち、そっと口づけした。

「キャ——ッ！！　これは恋の予感！！」

「ああ、私のいぬぬんが、ゲス男なんぞに——ッ！！」

周囲の人間が何か言っている。ってここはどこだ？

「ぶはっ！　これで契約完了ぬん。君はこれから私の使い魔ぬん。

斎藤透さん！！」

「お、俺の名前をどこで知りやがった……？」

「私とあなたは過去からの一心同体。それぐらいわかるぬん！」

「君は……？」

「申し遅れました。私はここオブシツケ☆王国の最高峰、オセシメ☆魔法学園に在学する、
いぬぬんぬん！！　これでも貴族ぬん、よろしくね、透様！！」

「は、はあ、そうなのか。じゃあ、さっきの犬も君なんだね？」

いぬぬんはとたんに赤面するも、事情を話してくれた。

「ぬん。お恥ずかしいところを見せてしまったぬん。1000年ぶりにまた会えたので、それはそれはうれしくて！！」

「1000年ぶり！？ その……コックーヤがどうのこうのって……」

いぬぬんは動揺したそぶりを見せ、

「そ！ それはまた今度話すぬん！！ また今度、じ〜っくり話してあげるぬん！！ 首を長くして待つといいぬんよ♪ ぬんぬん！」

いぬぬん……外見のかわいさは異常なんだけど、性格がなァ……どうもおかしいって
いうか……

どうも、魅力を感じないのは気のせいだろうか？

でも、さっき、キスをしてしまったし……。

「いぬぬん様ぁ、馬の骨と話ばかり話して、ちっともかまってくださらない……

これは略奪！ 略奪の匂いがいたしますわ！！」

キッ——っとその子は俺をにらみつける。

てめえ、俺になんか、文句でもあるのか？ あん！？

「こ、怖い……いぬぬん様ぁ、私をお守りください。

あの野獣から……」

「こら！ チュピ子！ 人をまた見た目で判断して！

ダメでしょ、めっ！ めっ！！」

ヒュン——ッ！！

何かが高速でこっちに来る。

俺はしゃがんで避けたが、弾丸だった。

「——ッ！？ 狙撃失敗！？ しょうがない……」

漆黒の翼をまとい空から降りてくるのは、黒髪で真紅の目をした美少女であった。

「ごめんね、いぬぬん……手が滑っちゃって☆」

「うそぬん！！ 絶対嘘ぬん！！ からちゅんひどいぬん～～。」

こいつらはからちゅんとチュピ子というのか……。

そして、周りの女の子を見ると、みんな犬を引き連れている……。

一体、なぜであるか？

しかし、俺はもっと重要なことを忘れてるような気がするのだが……？

すると、校門に馬の代わりに犬を使った馬車が一台、止まった。

赤いじゅうたんが校門から学院の入り口まで敷かれ、兵が出て来て言った。

「姫殿下のおな～～り～～～～！！！！！！！！」

「姫殿下！？」

馬車から降りた姫殿下の姿は、それはそれは美しかった。

プラチナブロンドの長髪。碧眼。スマートな肢体。ティアラ。優しそうで美しい顔。

透は.....一瞬で恋に落ちてしまった。

「今日は我がオブシツケ☆王国が誇る学問の最高峰、オセシメ☆魔法学園を視察に来ました。

みなさん、元気そうでなりよ.....ん？」

俺は赤じゅうたんの上をつかつかと歩み、姫に近づき、宣言した。

「姫殿下、あなたは美しい。私、斎藤透を殿下の親衛隊長に任命していただきたい。殿下のこと、死ぬまで守り続けたい所存です。」

姫殿下は頬を紅潮させ、恥じらいながら言った。

「ありがとう、かわいい兵隊さん。でもね、もう親衛隊長っていうのは——」

「その邪悪なるけだもの！ 高潔なる姫様に失礼だぞ！

下がりたまえ、闇に堕ちたくなければな！！」

見るとそこには、眼帯をはめ、キッとにらんでくる少女の姿があった。

アッシュブラウンの髪。ブラウンの瞳。手には本を持っている。

「貴様なんぞ、混沌の真なる闇に手早く葬ってくれるわぁ！！ いざ！！」

俺には戦闘に関する感があった。

俺は手をかざし、解放の詞を唱えた。

何を言えばいいのか、分かったのだ！

「世界に革新をもたらす、紅蓮の邪王、チューブイよ！！

今こそ、我に力を与え、愚かなる世界に鉄槌を下せ！！」

ピカチュウウウン！！！！

チューブイはすさまじい閃光を放ち、その形態をまがまがしい剣に変え、

俺の手に収まった。

「この剣の名前はチューブイソード・ヴァーミリオン……。

血に飢えしチューブイか……」

「我の名はすずめっちゅ！ 貴様を葬り去る者の名だ。

愚かなる反逆者に無窮の闇を！！ スズメ・デステラー！！」

すずめっちゅは渾身の魔法を唱える。俺は剣気でその魔法を防いだ。

だが、すずめっちゅの魔力は強い。俺は気を失いそうになった。

「ちゅーっちゅっちゅ！ テラーは気絶系の魔法。

もらったっちゅ！！」

すずめっちゅは加速。一気に距離をつめ、俺の懐へ入り、

その手にした魔本で、俺の顎を撃ち抜いた！！

「ぐっ……あっ……」

「……………」

すずめっちゅはなおも呪文を詠唱している。俺は頭に来て、

チューブイソードを適当に横薙ぎに振るった。

「おっと……」

すずめっちゅは適当によけ、空に飛んだ。

俺も気合いを入れて、飛んだ。

「むっ……ただのアホだと思っていたが、まさか飛べるとは……。」

永遠の魔水よ、わが敵を凍らせろ！！ デスフリーズ！！」

「甘い！ 紫電・チューブイソード乱れ斬り！！」

「ぎやあああああああつ！！！！」

飛ばした斬撃の一つがすずめっちゅにあたり、すずめっちゅはに落下していく。

「はっ！ 大したことないやつだなんて、あうっ！！」

俺の体はこわばり、動きづらくなってしまった。

きっと、さっきのフリーズで、凍結状態になってしまったのだろう。

「ちっ……相打ちか……」

俺も地へと落下した。

◇ ◇ ◇

下ではすずめっちゅが苦しそうに唸っていた。すずめっちゅは苦しそうだ。

「はぁ、はぁ。漆黒の光よ！ 我に力を！ スズメヒール！！」

すずめっちゅは体力を回復した。しかし――

「甘いんだよ！ 怒りの通常攻撃！！」

俺は凍結で技が出しにくくなっていた。

「ぬるいわ！！ 魔本乱舞！！」

すずめっちゅの魔本がうなった。俺の顔を強打していく。

痛い！！

「……………」

すずめっちゅは何かを詠唱している。

俺も詠唱を思いつき、唱える。

「深淵の闇、朽ちることのない絶望。愚かなるものに死の制裁を！

ギガバーサク！！」

「ぬっ、は、早い！！ 詠唱を中途完了。ビッグエクスペロージョン！！」

ドゴォォオン！！！！

魔法学園の中庭は炎に包まれた。

いぬぬんはそれを、なんとも美しいものを見るように、恍惚の表情で楽しんでた。

だが――

「フハハハハハ、生ぬるい攻撃よ！ 滅び去るがいい！！」

俺は身体能力を向上。バーサーカー状態になっていた。

俺は消えかける意識の中、剣を最大限に肥大化させ、渾身の一発をぶち込む覚悟を決めた！！

「くらいな！ 巨人・通常攻撃LV4！！！！！！！！」

「ひゃああああああっ！！ ごめんなさいiiiiiiii！！！！」

すずめっちゅの体は宙に舞った。

◇ ◇ ◇

第2異 ロンド姫

俺は戦闘が終わり、地面に突っ伏した。

周囲から歓声が沸き起こった。。

「お前、すごいぜ！！ 姫殿下の親衛隊長を斬り伏せるなんて、

まるで、どこかの大魔王みたいだぜ！！ かっくいい！！」

「ほんとすごい！ 無辜の親衛隊長をバッサリ！ 鬼でしかない……。」

「すごいぬん、すごいぬん。流石私のダーリン。鼻が高いぬん♪」

ロンド姫は啞然としていた。

それもそうだろう。自分の親衛隊長が何もしていないのに、

斬り伏せられ、倒した本人も力尽きて倒れてしまっているのだから。

しかし、ロンド姫は意を決したかのように透のもとに歩み寄り、言った。

「あなた、お強いのですね。私の親衛隊の隊長をあっさり斬り伏せるぐらいですから……。
勇敢で男前で……」

ロンド姫の頬はなぜか紅潮していた。

そして――

「いいでしょう。私、ロンド姫の名のもとにあなたを
親衛隊長に任命します。これからは王宮に住みなさい。」

そして、誰にも聞こえない声で……

「いつも私のそばで……」

いぬぬんは不満そうであった。抗議の声をあげる。

「なっ！　ちょ、ちょっと待つぬん！　これは私の使い魔、透！

透様ぬん！　姫殿下には渡せないぬん！！」

「……………」

姫殿下は考えるそぶりを見せ……

「……………いいでしょう。あなたも王宮に来るのです。」

歓迎しますよ、いぬぬん」

その声を聞いたのか、透が目覚め、でれ〜っとした顔をしている

(あ〜う〜いつの間にか三人称になっちゃった、てへっ♪)。

「ぬ、ぬぬぬぬぬぬ……」

いぬぬんは不満そうであった。

◇ ◇ ◇

そして、俺は親衛隊長として、 Rond姫に仕えることになり、

すぐに王宮へ向かうことになった。

不満顔のいぬぬんとからちゅんとチュピ子も一緒であった。

3人とも一応、姫様の親衛隊に入隊したらしい。

Rond姫は言った。

「さっ、着きましたよ。ここがオブシツケ☆王宮です」

犬馬車を降りてみるとそこには――

広大な庭園。荘厳な建物。しかし、それでいていやらしくない、

素晴らしい王宮であった。

庭園には犬が放し飼いにされていて、フリスビーを気持ちよさそうに、

追いかけ、キャッチしていた。

「私も！ 私もあれがしたいぬん。透様ぁ、投げて、投げて」

「ダメだ！ 投げてやらん！！」

「ひどい！ 千年前の約束を忘れたっていうぬん！？

ひどいぬん～～。」

「覚えとらん！ これっぽちもな！！」

「もういいぬん！ 透様のバカあああ！！」

ちょっと、厳しく言いすぎたかな？ あとで謝っておこう。

宮殿に入ると――

「うわあ、きれいぬんね～～」

「ロマンチックだね」

「これがシャンデリアチュピね♪」

吹き抜けの作りで天井が高く、シャンデリアが吊るされていた。

4階ほどになるようだった。

「さっ、各人の部屋に案内します。」

チュピ子の部屋、からちゅんの部屋、いぬぬんの部屋と来て、

透が案内されたのは……

「透殿は私を守るため、私と一緒に寝室で寝ます！」

異存はありませんね？」

俺の気持ちは天にまで昇るほどに高まった。

そして、感謝と決意を述べた。

「 Rond姫殿下、ありがたきお言葉です。

この不肖透、これからも研鑽を重ね、あなたをお守りしていく所存です！！」

Rond姫は照れくさそうに笑い……

「よしよし、いい子、いい子」

頭をなでてくれた。

俺は膝枕をされ、されるがままになった。

「な、なななな、も、もういいぬん！ 勝手にするぬん！！」

いぬぬんは走り去っていった。

悪いことしたかなあ……。

俺は Rond 姫との寝室へ入った。

◇ ◇ ◇

夕食の宴会にいぬぬんの姿はなかった。

いぬぬんの部屋に行ってノックをしても返事がない。

(う〜ん、これはちょっと悪いことをしたかな。)

俺はノックする手を強めた。

「いぬぬん、なんだか知らないけど、悪かった！ 開けてくれいぬぬん！！」

そして――

ドアがそおっと開かれた。

「誰ぬん？」

(うわっ、相当やつれてる！！ 何があったんだろう。)

「今、ふさぎ込んでるとこぬん。邪魔しないで欲しいぬん。」

俺は言った。

「いぬぬん、お座り！」

「ぬん！！」

「いぬぬん、よし！！」

「ぬん！！」

「よしよし、いぬぬんは賢いなあ……」

「いぬ！！ いっぬ~~~~っ！！！！」

いぬぬんは少々考えたそぶりを見せ.....

「ちょっとだけ、入るぬん？」

「ああ」

俺はいぬぬんの部屋に入った。

◇ ◇ ◇

「1000年前の私たちの物語と約束を聞くぬん？」

「1000年前.....」

俺は考えたが、興味があったので聞くことにした。

「ああ、いぬぬん、聞くよ」

いぬぬんは顔をほんのりと上気させながら話し出した。

「私たちは昔は夫婦だったぬん。」

「夫婦!？」

「そうぬん。私は伝説の大悪女・イヌメラ☆だったぬん。」

「イヌメラ……聞いたことねえな。」

「無理もないぬんね。1000年前ぬん、仕方ないぬん」

いぬぬんはあきらめた表情を浮かべ悲しそうに続きを語った。

「本名はイヌメラ・ヌン・ロックフォードぬん。そして、

あなたは！ その旦那のクッキーヤだったぬん。覚えてないぬんね？」

「はい」

「仕方ないぬん。そして、初代にして最後のオブシツケ☆帝国を築き上げたぬん。

あの頃の私たちはすごかったぬん……。今じゃでかい顔してるアロエラードも

何もできなかったぬん。魔力で人々を洗脳。大帝国を築き上げたぬん。

従わない奴はみんな、犬のえさにしてくれたぬん。そして——」

「あなたは——コックーヤは私の親衛隊長にして、愛する夫だった。

いつも、私におびえているような様子だったけど、強かったぬん！

かっこよかったぬん！！ 私の詠唱をいつも助けてくれて……。

私たちは愛し合い、幸せに暮らした——。私の魔力が底が切れ、

帝国が傾いた時も、約束したぬん！！ 約束したぬん！！

何度、生まれ変わっても、また巡り合い、結ばれようね。と。

天国では、いつも一緒にいようね。と。

また、生まれ変わったら、今度こそ、世界を掌握して、世界を破滅させようね♪

と約束したぬん！！ 覚えてないぬん！？ 悲しいぬん、ひどいぬん……。」

「そりゃひどい約束だな。」

「！！ もういいぬん！！ 出て行ってほしいぬん！！」

「いぬぬん……………」

「出ていくぬん！！！！！！」

俺は部屋を飛び出した。

いぬぬんが怒った。

おかしいこと言ってるのはそっちだろ。

でも……俺、何か忘れてる気がするんだよな。なんなんだろ？

◇ ◇ ◇

俺はロンド姫の寝室に入った。

ロンド姫は髪をとかしていた。

俺に気づき、あわてて言った。

「あっ……こんばんは……」

「こんばんは.....髪、きれいですね.....」

「え、あ.....そう？　ありがとう.....」

俺は意を決した。

「俺は Rond姫のことが.....好きです。ずっと守っていきたいです。」

Rond姫は頬を紅潮させ言った。

「私も、あなたのことが好き.....なんだろう.....運命の人なんだろうなって

思えるの.....」

「Rond姫、髪を梳いてあげますよ。」

「え、ええええええ！？」

俺は Rond姫の髪を梳くことにした。

Rond姫のサラサラの髪、甘い香り、とても幸せな気分になってくる。

「俺、 Rond 姫のこと、大好きですよ。」

「私のことは Rond でいいよ。私も大好き、透」

二人は甘い時間を過ごした。そして――

俺は Rond 姫の前に回り、頬を持ち、顔を近づけた。

Rond 姫はうっとり目を閉じている――

そして――

二人は初めて唇を重ねた――

そして、そのまま一緒に布団で寝た。

透はとても幸せだった。

◇ ◇ ◇

数日後――

ロンド姫は絶叫した！！

「1バレル800万オフトリ☆！？ と、とても払いきれません……。

ど、どうしましょう。もはや、軍用犬を手放すしか方法がない……………？

それでもしないと戦争……ど、どうしましょう？」

「なんだ、ロンド、どうかしたのか？」

「聞いてください！ 透！ アロエラードのアロエ重油は大高騰しているのです！！
酸性雨でアロエが取れなくなって……。

私たちの国のインフラはアロエ重油で成り立っています。

それがないと、国が動かないのです！！ しかも、買えないとなるとアロエラードは

武力で威圧しますし……どうしましょう？」

「……………俺にはよくわかんねえが、征服しちまうのも一つの手かもな。

アロエラードの重油が根こそぎ手に入れば、この国も豊かになると思う。

よしっ！ 武力を整えよう！！」

「！！ だ、だめです！！ アロエラードと戦争なんて……

最新鋭の戦闘機がわんさかいるのですよ！！ とても敵いません。」

「……う～～ん、どうしたものか……」

ロンド姫は神妙な面持ちで言った。

「ここは……軍用犬を手放すしかないようですね。」

「軍用犬か……」

「そうです！ 軍用犬はかわいい、賢い、強いので3拍子がそろっています。

ふんむ！！」

「ええ～～」

「大丈夫です。みんな納得してくれます。すぐに議会で軍用犬強制接収法

を可決させましょう。大丈夫すべてうまくいきます。」

なんか心配だなあ……。

俺の心配はその後の中した。

◇ ◇ ◇

数日たって。

「 Rond姫の暴虐を許さん！！ 軍用犬は我らが家族！！

それをさらに輸出するとは一体どういう見だ！！」

「軍事力を手放すな！！ Rond姫を縛り上げろ！！

Rond姫の暴虐を許さん！！」

暴徒と化した民衆が城に集結した。

Rond姫は絶叫した。

「みなさん、聞いてください！！

アロエラードは強大です！！

その軍事力は並ではありません！！

軍用犬の輸出は痛いですが、背に腹は代えられません！！

どうか、みなさん、分かって下さい、こらえてください。

涙を飲んで、ここはこらえて下さい！！」

民衆は言った。

「てやんでえ、バーロー！！　かわいい愛犬が接収されて、

黙ってられるかってんだ！！　総員、かかれ！！」

「イエッサ——！！」

民衆が城へ向けて突撃を始めた。

ロンド姫はうつむき、

「こうなっては仕方ない……」

と言い、短く祈った。

「主よ、あなたは偉大な方です。

すべてのものの王です。

私はとても無力な存在です。

主の力よ、ここに現れたまえ」

ロンド姫の祈りのあと、手には細いレイピアが具現化されていた。

とても美しい剣で、青白く輝いていた。

「少々お痛いですが、こらえてください——」

すると、ロンド姫は歌いだした。

このメロディーは……

懐かしい。

どこかで聴いた感じがするメロディー……

いったいどこで……

「主よ、あなたに依り頼めば恐れはない。

全身に力がみなぎってくる。

どんな時も 主に依り頼み、

祈り求めていこう——」

ロンド姫は加速、民衆のうずの中へ飛び込んだ！！

「は、速い！！」

「魅せます！！ 最速剣技！！ ブルックリン・ステップスラッシュ！！」

ロンド姫の剣技はまるで踊っているかのようであった。

輪舞—ロンド—は立てじゃない。

「ぎゃあああああっ！！！！！！」

「安心なさい！！ 峰内です！！」

私の民に怪我などさせない！！」

不思議な歌はまだ続いていく。

「あなたの御心、あなたの御言葉、

あなたを慕い、追い求める——

賛美することの喜びは

悲しみを消し去り、

新しい力で、私を満たす——

優しい神様にすべてを委ねて、

希望に燃える明日を歩いていこう——！！

これで最後です！！　ほとぼしる雷！！　ビスマーキーライジングスマッシュ！！」

青白い閃光と共に、斬撃が民衆を襲う。

「ぐうあああああっ！！！！」

ただ、民衆に傷はない。

ただ、肉体的に麻痺っただけで、斬られてはいないようだ。

「はぁ、はぁ……」

ロンド姫の膝が折れた。

体力がないようだ。

民衆へ問いかける。

「はぁ、はぁ、分かっていただけでしたか？」

民衆は言った。

「分かりました、あなたの決意。我らの軍用犬を国のために

お用ください……」

「お——、すげ——」

俺はあっけにとられた。

ロンド姫がこっちを見て笑っている。

「ねっ？ 私って強いでしょ？」

結集した民衆の人数は1500人であった。

ロンド姫は、一騎当千の騎士であった。

◇ ◇ ◇

かくして、軍用犬2000頭はアロエラードに輸出されることになった。

民衆の理解を得、ひとまず安心だが……

いぬぬんはそれから、食事もほとんど取らず、

自分の部屋に引きこもっていた。

いぬぬんも親衛隊に入った扱いになっているのに……。

俺は仕方なく、いぬぬんの部屋に行くことにした。

いぬぬんの部屋の前に来て……、

「うおっ！ 凄まじい瘴気だ……」

瘴気を感じた。

それもすごい……。

ノックしてみる。

「おーい……いぬぬん……いるかぁ……返事しろっ！！」

「い——ぬうううう、い——ぬうううう」

「おっ？」

「い——ぬうううう、私のことを無視して……」

そんなにロンド姫がいいぬんか！！

ひどいぬん、ひどいぬん！！」

「そんなこと言ったって……」

「もういいぬん！ 知らないぬん！！」

「いぬぬん……」

「バ——カ！！」

「ええええ」

まったく、いぬぬんは……

部屋を離れるとき、すすり泣く声が聞こえた。

「いぬぬんは透様のことを本当に愛しているのに……」

いぬぬん……

一抹の罪悪感を覚え、俺はその場を立ち去った。

◇ ◇ ◇

夕飯になった。

Rond 姫の甘やかしっぷりはエスカレートしていた。

あーん、で食べさせてくれるのだ！！

ふーふーして、口を拭いてくれて、なでなでして、

からちゅんとチュピ子が嘔然としていた。

「この年になって、これってどういうことなの？

姫もそうだけど、透もおかしいよ！」

「バカップルならぬクレイジーカップル、クレカってどこチュピね。

見てられないチュピ」

俺が全身全霊で甘えていると——

いぬぬんが来た。

「!!!! な、なな、何してるぬん!! その年になって!

バカップルぬん! 信じられないぬん! 信じられないぬん!!」

いぬぬんはパンをひつつかみ、泣きながら去っていった。

「あ——、悪いことしたかな？」

「そんなことないよ～、透はいい子だね～～」

チュピ子は顔をしかめて、

「うわ～～」

と言っていた。

ニコニコ。

ロンド姫は始終ニコニコだった。

第3異 全面戦争

最悪のニュースが飛び込んできた。

アロエラードで輸出された軍用犬が狂乱。

市民が大多数、怪我をしたそうだ。

アロエラード大統領、暴君・アロエッチュIIIはそれをオブシツケ☆王国の

陰謀であると断言！

宣戦布告をしたそうだ。

ロンド姫は直ちに戦闘開始の勅令を発した！！

「我が国の未来もここまでか……。

ほこりを失い、アロエラードの属国に成り下がるしかないのか……。

主よ、どうか、我らを助け、敵を打ち倒してください……。」

悲壮な Rond 姫。

「何、何億人敵が来ようが、俺が葬ってくれるぜ！

安心してくれ！！」

Rond 姫ははにかんで言った。

「そ、そうですね。あなたならきっとやってのけると思います。

あなたは私の親衛隊長。きっと、私の身を守り通してくれるでしょう。」

Rond 姫ははにかみ、赤面して言った。

「だって、あなたは私の王子様—プリンス—なのですから！！」

「！！」

「メロドラマはいいチュピ、これからどうするチュピ？」

「ボクだって戦えるんだよ。敵を殲滅しちゃうんだから☆」

俺は気になることがあった。

「いぬぬんの奴、こんな時にも出てこねえで、

何してやがる……………」

俺はいぬぬんの部屋に行くことにした。

部屋の前に来て、

「お～～い、いぬぬん、いるかぁ、返事しろお」

返答がない。いる気配がない。

「？」

部屋の鍵は開いていた。中に入ってみるが――

「あれ？ いぬぬん？」

そこは誰もいない――

もぬけのからであった――

◇ ◇ ◇

オブシツケ☆王国 首都オブジョク☆

そこはもはや戦場になっていた。

アロエラードの戦闘機が爆弾を投下していく。

結界に守られた首都を攻撃。

あたりは轟音に包まれる。

アロエラードは2日かけて、王国の国境沿いの多重結界を破って来たのだ。

ここももうじき破られるであろう。

国の魔法使いたちは魔法で応戦。

しかし、戦闘機は対魔法抵抗が強く、

そう簡単には落ちない。

俺は解放の詞を言った。

「世界に革新をもたらす、紅蓮の邪王、チューブイよ！！

今こそ、我に力を与え、愚かなる世界に鉄槌を下せ！！」

俺の手にはチューブイソード☆ヴァーミリオンが収められた。

俺は飛び、結界を超え、戦闘機を斬り落としに行った。

ロンド姫、チュピ子、からちゅんも飛んだ。

「紫電・チューブイソード☆乱れ斬り！！」

戦闘機を6機落とした。以外にあっけなかった。

「烏・大爆撃！！」

「チュピブピファイア！！」

戦闘機を落としていく。まさに無双状態。

Rond姫は何やらしきりに祈っていた。

長い祈りのあと……

「主よ、我に力を与えたまえ！！」

Rond姫からすさまじい光が放たれた！

「この一撃にすべてを懸けます！！ スピリットオブファイア！！」

ドガァァァン！！ グシャァァァン！！ ドガガガァァァン！！

すべての戦闘機は瞬く間に爆破した。

「すごいチュピ……」

「圧倒的だ……」

「あ、あれ！？ 私ってこんなに……？ 主よ、感謝します！！」

チュピ子とからちゅん、啞然。 Rond姫、おとぼけ。

すげえ、何その力……。

しかし、一機、巨大な飛空艇がやって来た。それはとても巨大な飛空艇であった。

その飛空艇から、一筋の太いレーザーが放たれた。

ズガァァァァン！！！！！！！！

結界はいともたやすく破られた。

中から、戦闘員が次々に舞い降りる。

「！！　まずい！　地上が血の海になってしまう！！

早く止めないと！！」

「あの飛空艇もまずいなあ。もう一発放たれたらオブシツケは終わりだ。

チュピ子！　戦闘員を撃退！　からちゅん！　ロンド姫の保護！

俺はあの飛空艇を殺る！！」

「チュピブピファイア！！」

しかし、戦闘員の数は多すぎる……。

多数の戦闘員が地上に降りてしまった。

地上——

「結界が破られた！！　皆のもの！　心してかかれ！！」

「イエッサーー！！」

魔法騎士団の面々+軍用犬が戦闘員と戦っていく。

ズダダダダダダダ！！！！！！！！

すさまじいマシンガンの乱射。

「きゃああああああつ！！！！！！！！」

血しぶきが舞う。戦闘は激化した。

空――

俺は飛空艇を睨み据えた。

「深淵の闇、朽ちることのない絶望。愚かなるものに死の制裁を！

ギガバーサク！！ & 紫電・チューブイソード☆乱れ斬り！！」

飛空艇を無事に破壊できた。

しかし――

「アロエ我刃流 墮繩大刃！！」

「ッ！！」

俺はとっさによけた。

だが――

ドガガガガズガガガガズガガァァァン！！！！！！！！」

辺りで大爆発が起きた。

「ッッ！！！！！！！！」

な、何この破壊力！！ えげつねえよ、えげつねえよ！！

舞い降りたのは、

白銀の長髪、バイオレットの瞳のいぬぬんとカメラマンと

緑髪の少女であった。

◇ ◇ ◇

「ハッハ——！！ 俺の名はアロエッチュⅢ.

貴様をくびり殺す者の名だあああ！！ 覚えとけエッ！！」

アロエッチュⅢ.....。こいつは一体.....。

「アロエッチュはアロエラードの大統領ぬん！！

図が高い、あ、ひかえおろう～～！！」

「ずいぶんご機嫌じゃねえか、いぬぬん！！」

「.....裏切者をぶち殺すのは快感ぬん！！ もがき苦しむいぬっちゅよおお
おお！！！！」

「HEY！ テレビの前のよい子のみんな、今日も見ててくれたかな？

今日はアロエラードの英雄、アロエッチュをウォッチしちゃうよ！

世界全国に放送するからプリーズ、チェケラ！！」

この野郎……ふざけた野郎だ……。

「アロエ十字斬り！！」

「させねえよ！！」

俺はアロエッチュの懐に飛び込み刀を受けた。

「ほう、この激・オリゴ刀を受けるとは——

復活セヨ暗黒ノ巨悪！！ 鬼炎爆誕！！」

「ぐ、うう、うおおおおおっ！！！！」

アロエッチュのパワーが膨れ上がった。

「墮繩大刃！！！！」

ダガガガガァァァン」！！！！！！

俺は地面に叩き付けられた。

いってえ。

「じゃ、私は Rond 姫を抹殺しに行つて来ます☆」

いぬぬんてめえ、何言つてくれてんだオイ！！

すぐに追いかけてって……あれ？

体が動かせにくい……。

「ハッハー——！！ 墮繩大刃はなァ！！

敵の素早さを弱体化させるのさ！！ なぶり殺してくれる！！」

「ハッハー——！！ オブシツケももはやここまでだね、DEAD END！！

ヒヤハハハ」

クソッ！！　ここまでなのか……

魔法騎士団もジリ貧。 Rond 姫は危ない。そして――

「刀奔凄葬！！！！！！！！」

ここまでで、終わるのか、イエス様！　イエス様！　イエス様！！！！！！

「イエス様！！！！！！」

俺は絶叫していた。

えっ？　一体俺は誰を……。

あっ……思い出した、御子イエス様だ。俺の目には涙が流れていた。

もう負ける気がしねえ！！

キュピクィィィン！！！！！！！！

チューブイソードはまぶしい光を放ち、

青白い美しい剣へと姿を変えた。

「こ、これは、御言葉の剣.....霊の剣か.....」

「顕現セヨ終末ノ魔獣 ブラックイクシード」

オオオオオオオオオオ.....

アロエッチュも力を解放したらしい。

全身は黒く隆起し、まがまがしいものになっている。

「HEY！ みんな熱くなってるね！ まさに聖対悪

神対邪悪なものって感じだね☆ どっちが邪悪かなんて見ればわかるよね☆

そこの黒髪！ うちの暴君、倒しておくれな！！

では引き続き勝負の行方にチェケラ」

俺は御言葉を紡いだ。

「く御言葉が開かれると光が射し出で 無知な者にも理解を与えます。

119 編 130 節〉

ゴッドスラッシュ！！」

「ぐああああああっ！！！！！！ て、てめえ、なんだその力は！！」

「く疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。

休ませてあげよう。

マタイによる福音書 11 章 28 節〉

ハレルヤホーリネス」

俺は最大現オ魔法を放った

辺り一帯が優しい光に包まれる。

「ぐ、こ、これは……」

「これはな聖属性の攻撃の威力を高めてくれるんだよ！！

これで最後だ！！

〈起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り

主の栄光はあなたの上に輝く。

イザヤ書 60章 01節〉

天絶・ゴッドストライク！！！！！！！！！！」

「ひゃああああああああ、ごめんなさいiiiiiiiiii」

俺はアロエッチュの悪しき心を粉々に打ち砕いた。

◇ ◇ ◇

Rond姫は無事であった。

祈り、光が出、いぬぬんを圧倒したらしい。

テレビのリポーターからインタビューが来た。

「キミ！！ よくやってくれた！！

うちの暴君を倒してくれて。

勝因はなんだい？」

「もちろん、イエス様ですよ！ 依り頼めば恐れはないんですよ！（詩編 56編5節）
神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネによる福音書3章16節）

独り子イエス様を信じて、永遠の命を勝ち取りましょう。

聖書を差し上げますよ」

リポーターは感動している。

「ぐす、ぐす、そうか。君の力はイエス様によるものだったんだね。

テレビの前のみんなも一緒に信じて救われよう！！

一人も滅びないでって書いてあるからな！！

大丈夫だ！！」

それから、しばらくして、全世界がイエス様を信じる超リバイバルが起きたのは、

不思議なことではなかった。

◇ ◇ ◇

エピローグ 結婚式。そして――

「早く早く、遅れちゃうよ！！」

「そう焦るなって！ 大丈夫だから！！」

「でも、結婚できるなんて夢みたい。夢のようだわぁ～～。」

「そうぬんね。いぬぬんも一緒なんて夢みたいぬん。」

いぬぬんからあの後、わびがあった。

俺が余りにも Rond 姫に傾くのが許せないから、

部屋に閉じこもり、魔法を構築。

アロエラードに酸性雨を降らせ、重油を高騰させ、

軍用犬を狂乱させ、戦争に持ち込ませたらしい。

アロエッチュと組んでいたらしい。俺ごと滅ぼす気だったらしい、

怖いやつだ。

そして教会で――

「新婦、 Rond、 いぬぬん。あなたがたは新郎、透を

病めるときも健やかなるときも、愛することを誓いますか？」

『誓います！　ぬん！』

「新郎、透。あなたは誓いますか？」

「誓います！」

「では、誓いのキスを……」

「私からぬん！！　譲れないぬん！！　ダメぬん！！」

「いいえ、ここは姫である私から！　私からですよね！？」

「違うぬん！　私ぬん！！」

「ダメです！！　私です！　慎みなさい！！」

「新郎、決断を」

決断って……。

俺は Rond 姫からにしたいんだけど、いぬぬん怒るし、傷つくって言うし、悩ましい……

う〜〜ん、どうしよう……。

「新郎……？」

『どちらですか！！ ぬんぬん！！』

え〜〜〜、考えても分からないよう。

「では Rond、いぬぬん、早い者勝ちで」

「では、いざ！」

「ぬん！ 負けないぬん！！」

二人の口が近づいてきて……………。

◇ ◇ ◇

はっ！ んっ！？ ここは！？

お、俺の部屋じゃねえかああああ！！！！

ああ、いい夢だった。

俺様大活躍！ あっ！ 俺様なんて……

イエス様、イエス様。

◇ ◇ ◇

「え～～、今日は転校生が二人いる。

では、入って来てくれ。」

ガラッ！

あっ！！

プラチナブロンドの髪の子と、白銀の髪の子……。

「鈴木あんなです☆

聖書の証しをするのが趣味です。

これからよろしくお祈いします！！」

「丹生谷めろです☆

ありを殺すのが趣味です。よろしくお祈いします☆」

え、え、えええええ～～！？

『ニコっ』

二人はこちらを見て、にこっと笑った気がした。

俺の学園生活に春が来た。そんな予感がするのであった——

END——

あとがき

ちょっと長くしちゃった。

超りバイバルがうまく表現できなかった。

久しぶりにキャラが立ち気味だったので、書いていて楽しかった。

序盤の暗いシーンを書くのは精神的にきつかった。(じゃあ、やるな！！)

お読みいただきありがとうございました！！

もう次回は別の作品でお会いできると嬉しいです！！

それでは、ノシww

使用聖書：新共同訳

林愛根

犬の使い魔 ～犬とアロエとリバイバル～

著 林愛根

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
